ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　ぼんやりとした視界の中、誰かが走ってくる音がした。

　一番最初に樹葉、次に詠、最後にレイ……そう気がつくのに、少し時間が掛かった気がする。

　三人の口が何やら動いているけど、頭が、内側からガンガンと叩かれているような感覚のせいで、何を言っているのかよく分からない。

　胃の中から何かが逆流してくる気持ち悪さを抱えながらも、俺の体は無理矢理に起こされたのを最後に、俺の視界はブラックアウトしていった。

　目が覚めると、一面に白い色。それが自室の天井であることに気がつくまで、俺は少し時間を要した。

　ああ、ここは布団の中か……と、痛む頭で思ってしまう。

　ふと、俺の手が拘束されているような感覚がして、上体を起こした。見れば、樹葉が俺の手を握ったまま眠りこけている。

　なんか以前にも似たようなことがあったっけ……と思いつつ時計を確認したが、現在は午前六時。日付は、会談があった次の日だ。

「……よく考えてみれば、タイムスリップなんかしてるわけないか」

　少しずつはっきりしていく思考で、俺はようやく自分が馬鹿な事を考えていることに気が付く。もしや家出する前に時間が戻ったのか？　なんて思ってしまったのだ。科学技術の発達した現在でさえ、タイムマシンなどというものは開発されていないのだから、タイムスリップなんてしていないのは当たり前のことだった。

　そんな時、部屋の戸が開く。ここでマルクスさんが入ってきたら、失笑してしまう自身があったのだが……入ってきたのは、別の人物だった。

「あ、ロラン！　目が覚めたんですねっ？」

　詠だ。エプロンをつけて、手には小さな土鍋。多分お粥か何かだろう。

「いやぁ、驚きました。任務から帰ってきたら、ロランが倒れていたんですもん……一体、何があったんですか？」

「ああ、いや……」

　詠にそう聞かれて、俺は口篭る。

　別に話せないことがあったわけでは無く――いや、ある意味そうなのだが――ただ単に俺にも何があったのか思い出せないだけだ。

　思い出そうとすると、ただでさえ痛む頭がさらに刺激される。

「あ……ロラン、無理しなくていいですよ？」

　顔を歪めた俺を心配してか、眉を八の字にして詠が優しくそう言った。

「……悪いな。ちょっと、記憶があやふやでさ。それ、食べていいか？」

　脇に置かれた土鍋を指してそう聞くと、詠は「ええ」と頷く。

　蓋を開けると、中は俺の予想通りお粥で、白い粥の中心には赤い梅干が一つ乗っていた。

　それを見ると、少しずつ昨日の記憶が蘇ってくる。

「ああ、そっか。俺……」

「……？　どうしました？」

「いや。自分がなんで倒れたのか、思い出してさ……後で皆に話すよ」

　最近も似たようなことで倒れたのに、思い出すのに随分と時間が掛かってしまった。『血』を見ないよう、生活には細心の注意を払っていたはずなのだが……我ながら呆れて何も言えない。

心中で溜息を吐きながら、俺は詠の作ってくれたお粥を口に運ぶ。

「……ところで、一人足りない気がするんだけど……なんかあった？」

　途中、そう言えばレイの姿が見えないな、と思った俺は、何故か脇で心なしかニコニコしながら俺の食事風景を眺めている詠にそう聞いた。

「レイですか？　あー……なんか、『ちょっと聞きたいことがあるから』とか言って、少し前から出ていますよ。どこに行くか、までは言っていませんでしたけど……」

「そうか。それとさ……」

「あ、あはははは……」

　視線だけで俺の言いたいことに気がついたのか、詠が苦笑いを浮かべる。

「樹葉なら、ロランをここに運んだ後から、ずっとこんな感じですよ？　僕らの中で一番疲れていたはずなんですけどね」

「一番疲れていた、って……任務は会談だろ？　そんなに疲れるほど緊張したのか？」

「あ、いえ。それについてはレイが帰ってきてから話しますよ」

　一体何があったのか、という疑問がとめどなく湧き上がってきたものの、後でちゃんと説明してもらえるらしいので、今は我慢する俺。

　そんな話をしていると、樹葉の手がピクンと動いたのが俺の手に伝わってきた。

「……ほぇ？　ロラン？」

　目覚めたものの、まだ頭は起きていないらしく、そんな声を出してしばらくの間、樹葉は俺の顔をジーッと見つめていた。

　……なぜだろう？　何だか体が熱い……というか、ものすごく目を逸らしたい。

　負けじと見つめ返す、というか半ば睨み返す俺。だが握られた手から、トクントクンという鼓動が聞こえてくるような気がして、俺はついに詠に助けを求めるように視線を樹葉から離す。

　だが、詠はニヤニヤと俺たち二人を交互に見た後、そさくさと部屋を出ていってしまった。戸を閉める際に少しだけ顔を覗かせて、なんか俺に向かって『後は任せましたよ？』みたいな空気を出していったのが無償にイラっとくる。一体これをどうしろと？

　……いや、負けるな俺。

　なんて気合を入れたのだが、

「ぅにゅぅ……ロラぁン……」

「っ？　ちょ、おまっ？」

　なんて寝ぼけた声で呟きながら、樹葉に抱きつかれてしまい、俺の心は早くも折れそうだ。

　てか、これはヤバい。腕までガッチリホールドされて全然動けない。つーか力強くねっ？　お前後衛だろっ？　力使うような武器使ってないじゃんっ？　なんで前衛の俺が動けないレベルの力があるんだよっ？

「……くぅ……」

「おい待て寝るな！」

　実際問題、さっきから色々ヤバいのだ。主に俺の体の反応的な意味で、である。確認するまでもなく、俺は男で樹葉は女。まだ中学生といえど、異性なのだ。いや、もう中学生だから、体の発達も少しずつ進んでいるわけで、樹葉もそうだが俺の体だって男性的な反応がある。

　初めて会った時から思っていたことではあるが、樹葉は――まあ樹葉に限らず、レイも詠もだが――こう、顔が整っているというかなんというか……有り体に言えば、可愛い女の子だ。

　しかも、普段は全然気がつかなかったのだが、樹葉は慎ましやかとはいえ、ちゃんと出ているところは出ているらしい。当てられている感覚が分かってしまうレベルとは恐れ入った。

そんな子が自分に抱きついているとなれば、俺の反応を誰が責められようか。

つーか本当にどうするのこの状況っ？　こんなところ誰かに見られたら……いや、もう詠に見られているんだけどさ、それでもだよ。突然部屋に入られでもしたら、

「ロラン！　目が覚めた……って……？」

　ほら見たことか！

　入ってきたのはレイだった。驚きつつも嬉しそうな顔をして扉を開けた彼女だが、俺と樹葉の惨状を見ると、先ほどとは別の意味で驚きの色を見せる。

　そりゃそうだ。傍から見れば、俺たち二人が抱き合っているようにしか見えない。ただ抱き合っているならまだ「俺の目が覚めたから」とか言えば誤魔化せるんだろうけど……これはどう控えめに見ても、そんな風には見えないだろう。

「待ってくれ！　これにはちゃんと事情がある！　俺の責任ではない！」

「……ｚｚｚ。んん……はやくぅ……」

「ちょっと黙っていてくれませんっ？」

　悩ましそうな声で、樹葉はなんというか……誤解されかねない、さらに状況を悪化させるようなことを言う。

「……あー、なんかお取り込み中なら、時間をおいて後で出直すけど……どうする？」

「『どうする？』って疑問形で聞きながら、ドアを閉めようとするのはやめてくれ！　ってか助けてっ？」

　結局この後、この場から逃げようとするレイを必死で説得し、ようやく樹葉も覚醒したところで一段落。てっきりこの後もひと悶着あると予想していた俺は少し面食らってしまったが、部屋を出る時、二人が少し顔を赤らめていたのを見て、自分が甚だ随分と楽観的な思考をしていたと反省する。

　この誤解は絶対解かねばと決意して、俺も二人に続いて部屋を出た。

「……なるほど」

　リビングで、三人から昨日の会談についての報告を聞かされた俺は、椅子の背もたれに背中を預けながらそう呟く。

　会談が罠だったことを聞いても、驚いていない自分に驚いた。ほとんど動じなかった、といってもいいくらいだ。

　俺はちらりと、レイの方に視線を向ける。

　闘悟と相対した彼女の話からすれば、どうやら闘悟の名前は『闘悟』ということらしい。要するに、あいつが勝手に名前を変えた、などと思っていたのは誤解だった、というわけだ。

　俄かには信じられない――と、一昔前の俺ならきっとそう言っていただろう。

　不思議と、彼女の言ったことを信じている自分がいた。それが、彼女に対する『信頼』とかそんなものなのか、それとも、胸の奥深くでは、本当は闘悟のことを『信じていた』自分がいたからなのかはよく分からない。

　ただ、信用は出来ても、どこか冷めた反応しか出来ていない自分がいることも、同時に気がついていた。一度、本気で命のやりとりをしたせいなのか、正直なところ、「だからどうした？」と思っている自分がいるのだ。

　いや寧ろ、冷めた思考をしているどころか、さらに熱を帯びたようにも感じる。『怒り』という熱に。これが宿命……なのだろうな。結局のところ、俺はあいつのことを、もう許すことが出来ないところまで来てしまったのだろう。長い年月が、『水に流す』などと言う単語を風化させてしまったのだ。そしてそれを、俺は、そのありかたに疑問に思うことも、責めることもせず、いや最早、そういう自分でいることを推奨している。許しているのだ。多分きっと、これからもこの気持ちは変わらないし、変えていこうとも思わない。

　でも何だか、自分が酷く狭量なように思えて、嫌になるのも事実だった。

　レイは他にも何か言いたいことあるのか、口をモゴモゴとさせていたのだが、結局は何も言わないことにしたらしい。

　そういうわけでお開きになり、俺を含めた全員が部屋に戻った。三人は昨日の戦闘で疲れがかなり溜まっている、ということで、今日は学校を休むことにするとのこと。

　ちなみに俺は、現在自室のベッドの上で横になっている。そんな様子から言わずもがなかもしれないが、俺も学校は欠席する方向だ。もう大丈夫、と口では言ったのだが、三人はそれを信じてくれなかった。今日は丸一日、安静にしているように、とキツく言われてしまった俺は、若干不貞腐れながら、日ノ下から借りたラノベを読んでいる。

　……そう言えば。

　ふと気になって、文字を読む目を止めた。さっきリビングで、誰も俺がどうして倒れたのか聞かなかったことに気がついたのだ。

　なんでだろうか……と考えていると、コンコンという短いノックの後、ドアが開いた。

「具合、どう？」

　入ってきたのは樹葉だった。手には十数冊の本。多分、ベッドの上で何もやることがなくて暇そうにしているであろう俺のことを慮ってくれたのかもしれない。

　実際にはこうしてラノベを読んでいるので、別段暇というわけではないのだが、その気遣いは素直に嬉しかった。とは言え、

「どう、と言われても、だから大丈夫だって」

　この通り元気なので、やはりこれはやりすぎではないかと思う俺の気持ちも理解して欲しい。

　だが、樹葉は溜息を吐いて首を振る。

「ダメだよ。倒れたんだから……」

「そう言われてもなぁ……この通りピンピンしてるわけで、悪いと言うか何というか……」

「ダメったらダメ！」

　ほんの少しだけ頬を膨らませて、樹葉は少し声を強める。

　樹葉は手に抱えた本を俺の机の上に置くと、椅子を俺のベッドの脇まで持ってきて、そこに座る。……どうやら、つきっきりで俺を看病するつもりらしい。

　明らかに心配のしすぎだとは思うものの、倒れたことは事実である以上、俺もあまり文句は言えなかった。

「……ねぇ、ロラン」

「……ん？」

　ふと、今度は少ししんみりとした、それでいて優しい声色で、樹葉が話しかけてきた。

「あのさ、何かあった？」

「『何か』って？」

「昨日の夜」

「…………」

「私さ。皆と一緒にロランを部屋に運んだ時さ、『あれ？』って思ったんだよね。だってロラン、指以外どこも怪我なんてしていなかったから」

「…………」

「ロラン、台所で倒れてた。まな板とか出しっぱなしだったし、切りかけの野菜もその上に乗ってたから、料理の最中に倒れたってことだよね？」

「……ああ」

「包丁が床に刺さってたけど、多分それは関係無い。指は切ってたけど、ちょっと血が出ているだけで、それじゃ倒れる理由にはならないし……じゃあ腹痛？　それとも頭痛？　ねえロラン……」

「…………」

「何か私たちに話していないこと、ない？」

　そう呟くと、樹葉はひどく悲しそうな顔をする。それを見て、俺は悟った。

　ああ……もう、逃げられない、と。

「……なあ、『ＰＴＳＤ』って知っているか？」

　ボソボソとつぶやくように、俺は語りだした。

　なんて弱い背中なんだろう。

　私、樹葉が、ロランの話を聞いた後、一番最初に思ったことがそれだった。

　一種の憧れ……とでも言えばいいのだろうか。遠距離から矢を放つことしか出来ない私にとって、レイちゃんやロランみたいに、体を張って敵と戦える人が羨ましかった。

　特に、たった一人で、たった二本の刀だけで、立ちふさがる敵をなぎ払い、切り捨てていくロランの背中は、私にとっての『理想』であったし、『強さの象徴』だったと言ってもいい。

　だから、たった一滴の血だけでパニックを起こしてしまう、という話を聞いた時は、俄かには信じられなかった。

　でも、現にロランはこうして弱い姿を私に見せている。

　思えば昨日の夜のロランは、ひどく憔悴していた。細い呼吸に、夥しい汗の量。まるで悪夢でも見ているようで、いつものロランとは明らかに様子が違った。出会って、一緒に暮らし始めてからもう二年が経つけれど、こんなに動揺したのは初めてだったと思う。ロランが家出した時でさえ、皆、もう少し落ち着いていた気がする。

　私自身、ロランが倒れているのを見た時は、自分でもびっくりするくらい取り乱してしまった。

「ねえ、ロラン」

「……っ？」

　私は、ロランの頭を抱えて、胸で受け止めた。慌てたような声が漏れたけど、今は、ロランを離したくない。

「闘悟のこともそうだけど、ロランから見て、私たちはそんなに頼りない？」

　ふと、私がここに、『ワルキューレ』に入った時のことを思い出す。

　ううん。正確には、ここに来たばかりのロランがどんな子だったのかを、私は思い出していた。

　あの頃のロランは、今とは違って、もっと打たれ強い子だった。

　傍から見ると、今のロランも割と強い子に見られがちだけど、『ワルキューレ』の人はそうじゃない事を知っている。詠ちゃんも、レイちゃんも、マルクスさんも、お姉様も……そして勿論私も、だ。昔に比べれば、ロランはずっと脆く、繊細になってしまった。

　別に、他の人が特別鈍いわけじゃないと、私は思っている。ロランが……本人が意識的にやっているかは分からないけど、彼がそれを隠すのが上手いだけだろう。一緒にいて、よく見ている私たちだからこそ、『本当のロラン』が分かる。

　根が真面目なのは今も昔も変わらない。訓練や任務の時に自分からふざけたりしないし、私たちとお喋りする時も、内容がちょっと堅苦しくて、会話について行くのが大変だったりする。

　悪く言えば『頭が固い』んだけど、よく言えば、同じ年頃の男子と比べると大人っぽいのだ。

　でも、昔はもっとフランクだった。

　自分からふざけることは無かったけど、周りの空気を読んで一緒にふざけてくれることもあったし、辛そうな顔を隠しながらも、私たちの好きそうな会話を振ってくれることも時々あった。空回りすることもあったけど、要は私たちの事を、ちゃんと理解してくれようとしていたんだと思う。

『研修所』から出てきたばかりで、こっちの世界じゃ失敗も多かっただろうに。そんな様子なんておくびにも出さず、毎日明るく振舞っていた姿は、今でも私もよく覚えている。

　レイちゃんや詠ちゃんは、そんなロランを見ていると、何だか楽しそうで……そして、それは当然、私も同じだった。いや寧ろ、きっとその頃から、それ以上のものをロランに感じていたのかもしれない。

　そんなロランだけど、それでも何か隠し事……自分の親友のことは、誰にも話してくれなかった。事あるごとにどこかへ出かけては、決まって少し落胆した様子でここに帰ってきたものだ。まあ隠し事の一つや二つ、みんなあるだろうと、私たちは特にロランに追求することもせず、なるべくいつも通りに振舞って、それが私たちにとっては辛かった。

　でも、その時一歩、踏み込むべきだったのだ。結果的にロランを困らせてそまっても、ロランが嫌がったとしても、ここで歩み寄るべきだった。それが本当の仲間なのだから。そうしなかったから、ロランはもっと傷ついてしまった。

　いつからだろう。ある日を境に、ロランは変わってしまった。今にしてみれば、親友がどこにもいないって知ったが故だったのだろう。

　本人に変わった自覚があったのかは分からない。でも、一緒にいた私たちには、ロランが私たちとの間に壁を作ったことに、すぐに気がついて……そして同時に、そうなってしまった後では、もう遅いことに気がついた。

　朝、「おはよう」と挨拶を交わすたび。学校に行く時、「行ってきます」と言うたび。「ただいま」と言うたび。食事の前に「いただきます」、終わった後の「ごちそうさま」と言うたび。寝る前に「おやすみ」と交わすたびに、もう昔のロランがどこにもいない……いなくなってしまったのだと気づかされてしまう。

　会話をしていて、後ろ姿を眺めていて、一緒に生活していて、良く分かる。全然別物なのだ。自分たちに向ける表情や声や、仕草が。

　それが自分の力によるものじゃなかったのが悔しくて、その夜また泣いちゃったけど、それでもまた、昔のロランが戻ってきてくれた。いや、戻ろうとしてくれるようになった、と言うべきかな？　まだぎこちないけど、それでも精一杯、私たちと打ち解けようとしてくれている。

　日ノ下君には感謝の気持ちしか無い……かと言われると、実はちょっとだけ嫉妬してるところもあって、女心は複雑だ。

　いや、女心じゃなくて、もっと違う……そう。

これは多分、俗に言う『恋心』。

「ねえ、ロラン。覚えてる？」

「……？」

　私はロランを抱きしめながら、そう呟いた。

声が震えているのは、ロランがあの時のことを覚えていてくれているか不安だからなのか……でも同時に、私はこうも思っていた。ロランのことだから、きっと忘れているだろう、と。

　その時の事を、私がこっちの小学校に通い始めて、数ヶ月経った時のことを、私は語り始めた。

『研修所』を出て『ワルキューレ』に入った私たちは、お姉様の命で地元の小学校に通うこととなった。これは別に『ワルキューレ』だから、という話ではなく、どこの『チーム』でも一般的にはそういう流れになるのが普通だ。私たちはあくまでも、年齢的には学生。『トラース』うんぬんかんぬんも勿論大事だけど、それ以上に学問に勤しむ義務がある。

　子供の適応力は高い。初めて外の世界に来て、いきなり見知らぬ場所に放り込まれても、少し経てば慣れてくる……んだけど、当然のことながら、全員が全員そうとは限らない。

　慣れない環境に適応出来ず、周りの子たちと上手くやっていけない子だっている。私がまさにそれだった。

　勿論ロランや詠ちゃん、一個上のレイちゃんだって、完璧に上手くやれていたかと言えばそんなことは無い。最初はやっぱり戸惑っていたし、私の知る限りでも、回りの子たちの話の内容についていけないことだって一度や二度では無かった。

　でも、私はその中でも群を抜いてひどかったのだ。元々、あまり人と話す方では無かったせいか、気が付けば周りに取り残されることが多く、自然と私と話してくれる人もいなくなってしまった。

そのあたりからだっただろうか。私がいじめられるようになったのは。

いや、『気がついたのは』というべきかもしれない。

　殴られたり蹴られたりとかは無かったけど、明らかにクラスメイトから無視されるようになったのだ。

　その頃は、ロランや詠ちゃんとはクラスが別だったし、いじめといってもそんなに目立つようなものじゃなかったから、『ワルキューレ』の仲間たちは誰も気がつくことはなかった。私が黙っていたのも、気がつかなかった理由の一つだろう。

　最初は無視だけだったのが、次第にものを隠されるようになったりしていって……私は、どうして良いか分からなかった。こんなこと、相談されたって迷惑だろうと、誰にも言えなかったのだ。

「でも、ロランは……気がついてくれたんだよ？」

　誰も気が付いてくれなかったことに、ロランだけは気がついてくれた。そのことを、私は昔も今も、そしてこれからも、決して忘れたりはしない。

　クラスで孤立していた私の味方になってくれて、それが原因でロランもクラスの皆とギクシャクしてしまったりもしたけど、それでもロランはずっと私の傍にいてくれて、支えてくれた。「レイちゃんや詠ちゃんには言わないで」って頼んだ時は、ちょっと困ったような顔をされちゃったけど、それでも私のお願いを聞いてくれた。

　お姉様が私たちに洲王中等へんも入学を勧めたのは、お姉様がそんな私たちを見かねてのことだったのだろう。小学校のクラスメイトたちのほとんどは、今レイちゃんや詠ちゃんが通っている、公立の中学にいる。洲王中等には、あの頃の私たちを知っている人は、『ワルキューレ』に所属している人以外はほとんどいないのだ。

　あの時、どれだけ救われたことか……ロランは分からないかもしれないけど、『支えてくれる人がいる』ってだけで、私は頑張れた。戦えた。

　だから――

「だから、そんな顔をしないでよ。ここには、ロランの味方が……私がいる。辛くて苦しくても、私が一緒にいるから……！」

「…………」

「だからもっと、頼ってよ……！　ロランの弱いところ、もっと見せてよ！　だって……だって、私たち、仲間でしょっ？」

「……っ」

　俺は、樹葉の言葉を、黙って聞いていた。

　強く抱きしめられたせいで苦しく、最初は抗議のために床をバンバンと叩いたりもしていたのだが、樹葉が搾り出すように言葉を発し始めてからは、何だかどうでも良くなっていた。

　首の後ろが熱くなる。樹葉の顔を見るまでもない。

　樹葉がどんなに不安だったのか、理解したつもりで、俺は全くもって理解していなかった。

「頼ってよ」、か……

　思えば、俺はこれまで、何でもかんでも一人でなんとかしようとしてきた。俺にその気はなくても、結果的にはそうなってしまっていたところが、何度もあった気がする。

「……ごめんな」

　何故もっと早くに気が付けなかったのだろう。

　そう思うと、自然とそんな言葉が出てきた。

「……もう一つ、謝らせてくれ」

　そして、俺はついに認める決意をする。これまでずっと目を背けてきた、そのことを。

「……？」

「『ＰＴＳＤ』のことを……さっきは『隠す気は無かった』なんて言ったけど、本当は違うんだよ……俺は本当の自分の心を、見ないようにして……本当は、できれば皆には知って欲しくなかった」

「ロラン……」

「だってそうだろ？　『血を見ただけで戦えなくなる』奴なんて、いたって邪魔なだけだ。俺は……『まだ白状するのは早い』とか『タイミングが無かった』とか思いながら、本当は皆に……お姉様やマルクスさん、それに三人に見捨てられるのが怖かったんだ

　……本当に、すまなかった。ごめん」

「……ううん。謝らなくていい。話してくれた……それだけで、十分だよ。

　でも、ロラン。ロランの言ったこと……ちょっと違う。私たちは、私は、ロランが役に立たないからって、絶対に見捨てたりしない。あの時ロランが私を支えてくれたように、今度は私が支えるから……

　だから、このことを、レイちゃんや詠ちゃんにも、ちゃんと話してくれる？

　ねえ、それとロラン……」

　そう呟くと同時に、樹葉の俺を抱きしめる腕の力が強くなる。

「私たち、もう『仲間』だよね？　本当の『仲間』になれたよね？」

　俺はただ、黙って嗚咽を上げることしか出来なかった。

　でも、きっと、肯定する俺の気持ちは、ちゃんと樹葉に届いてくれた。そう思う。